佐賀県の女性の活躍

現在の日本では、18歳になると男女の区別なく選挙権が与えられ、誰でも平等に社会参加することができます。しかし、第２次世界大戦以前は、選挙権は男性にしか認められていませんでした。

女性が政治に参加できるようになったのは、1945（昭和20）年のことです。その頃から女性の政治家や首長も誕生し、性別に関係なく個人が平等に輝ける社会を目指し、さまざまな取り組みが行われるようになりました。

□女性の社会参画の先駆者・奥村五百子

女性に参政権が与えられる100年も前に生まれ、積極的に社会運動に関わった佐賀県出身の女性がいました。奥村五百子です。

1845（弘化２）年５月３日、奥村五百子は唐津の高徳寺に生まれました。少女時代は５、６歳から三味線を習い、７歳からは読書や習字を習い始めました。当時、女性は学問に打ち込むより芸を覚えたほうがいいという世の中の風潮だったにもかかわらず、父で住職の了寛は、「これからは女性も学問が必要になる」という考えを持っていたのです。

五百子はとても元気な子どもで、正義感が強い性格でした。弱い者いじめをする男の子に対して立ち向かうなど、女性を侮辱する人たちに対しては、相手が目上の人であろうと堂々と反論しました。どんな時も公正で公平な考えを曲げない女性でした。

（高徳寺前住職・奥村豊氏 提供）

■奥村五百子
1845（弘化2）年～
1907（明治40）年

□郷土唐津の開発事業に貢献

幕末頃、議論や武術を鍛える場所として、高徳寺の境内に浪士たちが集まりました。五百子は、彼らをもてなすうちにその中心人物となっていきました。18歳の時、了寛の命により、密使として男性の姿をして親戚にあたる長州藩家老宍戸家の元に行き、無事に目的を果たすなど、数々の武勇伝があります。

1887（明治20）年、43歳の時、五百子は夫と離別して唐津に戻りました。商売をしながら３人の子どもを育てていましたが、その一方で、世話好きな性格だったため、近所のもめ事から地方政治の問題まで、あらゆる場面で頼りにされました。唐津港を国際貿易港として開港するため※1、東京の大隈重信邸に一団で陳情に訪れたのもこの年です。

五百子は自分の利益も顧みず、故郷唐津の事業を実現させるために多くの運動を行いました。主なものに、松浦橋の架橋事業、鉄道（唐津線）の開設、海軍貯炭場の払い下げ運動※2などがあります。

女性が表立って政治や事業に関わることが認められていなかった時代に、五百子は、大隈重信をはじめ佐賀県知事など数々の有力者のもとへ行き、働きかけたのです。政治にも強い関心を持ち、選挙運動の指揮をとったこともありました。

※1　1889（明治22）年、唐津港は国の特別輸出港に指定されました。
※2　払い下げ＝不動産などを売却すること

（山辺済氏 寄贈、高徳寺前住職・奥村豊氏 提供）

■大隈重信邸での陳情団
（奥村五百子は前列右端）

□朝鮮国訪問と婦人運動の高まり

奥村五百子の生家・高徳寺は、歴史的に朝鮮国とも深い関わりを持つ寺でした。兄で住職の円心は、仏教を広めるために朝鮮半島に渡り、釜山や仁川、元山に東本願寺の別院を建立。布教活動をより強化するために、五百子もたびたび光州を訪問しました。

1900（明治33）年、義和団事件が起こり、鎮圧のために戦った日本軍も多くの兵士が亡くなり、清に慰問団が派遣されました。五百子も慰問に行き、戦争で苦しむ兵士たちを目の当たりにしました。

■唐津市東城内二の門にある奥村五百子の銅像

当時の五百子はすでに50歳半ばでしたが、傷ついた人々を助けずにはいられませんでした。「国のために女性たちも立ち上がらなければ」と、1901(明治34)年に、戦死者遺族の救護のため、「愛国婦人会」を設立しました。この団体は全国組織で、最盛期には会員数が世界有数の団体でした。

演説が得意だった五百子は、全国を遊説して回り、数年で多くの会員を集めました。「着物の半襟一つ買うお金を節約して、寄附してください」と訴えるその熱意が、人の心を動かしたのです。

1907(明治40)年、五百子は63歳でその生涯を終えました。その後の日本では、女性たちによるさまざまな運動団体が創設されました。人のため、社会のために尽くす五百子の生き方は女性の社会参加に大きな影響を与えました。

■高徳寺の一室に保管された奥村五百子に関する資料
(高徳寺前住職・奥村豊氏 提供)

■高徳寺本堂の脇にある奥村五百子の墓
(高徳寺前住職・奥村豊氏 提供)

□社会で活躍した女性たち

小佐々祖伝尼もいたわりの心から多くの人々を助け、社会に貢献した女性の一人です。1872(明治５)年、現在の長崎県小佐々町に生まれ、嬉野市の光桂寺に嫁いだ祖伝尼(当時ツデ)は、夫を亡くした後、同寺の住職となりました。婦人会を結成し、女性たちに裁縫や書道を教えるなど地域のリーダーとしても活躍しました。

ある日、貧しい男性が寺にやって来た時、「食べ物を与えるだけではこの人のためにならない」と畑の仕事をさせながら寺に住まわせました。

1928(昭和３)年、祖伝尼が施設をつくると、体の不自由なお年寄りや身寄りのない子どもたちが集まりました。その後施設は、戦後の厳しい時代も乗り越え、社会福祉の施設として発展しました。祖伝尼の慈悲の気持ちは今も受け継がれています。

(社会福祉法人 済昭園 提供)

■小佐々祖伝尼
1872(明治5)年～
1948(昭和23)年

また、学者として化学の発展に貢献した女性もいます。黒田チカは、1884(明治17)年、現在の佐賀市に生まれました。勉強好きだったことから佐賀師範学校を経て、東京の女子高等師範学校(現在のお茶の水女子大学)に進学しました。

1913(大正２)年、日本で初めての女子大生の一人として東北帝国大学(現在の東北大学)に入学。女性が高い教育を受けることへの厳しい批判もある中、努力の末に大学を卒業し、国内の女性で初めて の理学士となりました。その後、化学分野で女性第１号の理学博士となり、女性化学者の草分けとして、多くの功績を残しました。

(国立研究開発法人 理化学研究所 提供)

■黒田チカ
1884(明治17)年～
1968(昭和43)年

さまざまな分野で自分の信じる道を切り拓いた佐賀県の女性たち。その歴史は、私たちがより良い社会を作り上げるために大切なことを教えてくれます。

考えてみよう!

女性の立場が低かった時代に、信念を持ち社会を変える運動や研究など、さまざまな分野で活躍した女性たちはどんな思いがあったのでしょうか?

(参考文献)
●『奥村五百子～明治の女と「お国のため」～』守田佳子 著
●『郷土の先覚者～明日を拓いた佐賀の人～』佐賀県教育委員会